

美術科の「やりくり」のたとえば

～「作品との対話」― 多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力 ―

木村信一郎

鳥取大学附属中学校 美術科

E-mail: kimura_si2@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Shinichiro KIMURA (Tottori University Junior High School) : An example of “Managing for solving problems” in art education. Dialogue through works - Ability to look at things from various perspectives and deepen their views of the world-

要旨 — 「想像力により人間関係を構築してゆく力」の養成をめざして、中学校第2学年の美術科教育での鑑賞活動に、オルタナティブ活動（物事を多角的な視点で見つめることに重点を置いた活動）の導入を試みた。題材として用いたのは郷土作家でイラストレーターの毛利彰の実物作品である。それらを鑑賞して感じたことを相互に出し合い、他者の感じ方をとりいれることで、自己の鑑賞力の幅と深さを高めることを目指した。このような相互討論の課程の取り入れは、鑑賞力の向上に有効であった。本稿では、その授業実践例についての指導案、用いた資料などを合わせて紹介する。また、他学年での実践についても紹介する。

キーワード — オルタナティブ、作品との対話

Abstract — I have tried to introduce “alternative activities” which emphasize rearing of abilities to look at things multi-directionally to expression and appreciation activities in art education of the 2nd grade of junior high school to nurse “ability for constructing harmonious human relations with imaginative power”. Real works made by Akira Mouri, (1935-2008), who was a renowned illustrator born in Tottori, were used as materials. The aim of the activity was to develop and enhance breadth and depth of appreciative power, by sharing their impressions obtained through watching those works. It was found that introduction of such discussion to a class of art was effective in improving appreciative power. In this article I will show a teaching plan of an example of practice of the class, together with reference materials used in the class. I will also introduce practices for the 1st and 3rd grades.

Key words — alternative, dialogue through works

1. 美術科の取り組みの概要

1.1 はじめに

「作品（作者：私・他者＝思い）との対話」

「作品との対話」。「対話」という表現は、“向かい合って話し合うこと。また、その話。”とあるように、互いに顔を見合わせ、声で会話する活動のようにとらえることが多いであろう。ここで私があげる「対話」とは、アメリカ・アレナス氏が提唱した“思考能力、対話能力の向上を目的に実践される対話による美術作品の鑑賞法”(＝対話型鑑賞)を示している。たとえば、鑑賞活動であれば、級友、先輩、後輩の作品に対して、直接的であったり、間接的であったり、方法は様々であるが、自分が感じ取った作品への

思いを送る活動は、作品を介した「他者との対話」といえよう。教科書や直接出会えない作家たちの作品について考える活動も「作品（＝他者の思い）との対話」と考えることができる。また、制作（表現活動）も「対話」と捉えて授業展開を行っている。例えば、これから描こうとする白い紙や形を作ろうとする素材がなるべく姿、色はなんだろうと自分自身に投げかける表現活動は、作品を介して自分自身の思いを探る「私との対話」と考えることができる。

「多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力」

国際化、少子高齢化等、様々な変化が進む我が国において、生徒たちを取り巻く未来は予

測不可能な世界となると考えられる。近年、アメリカ・デューク大学の調査によれば、『2011年度に小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就く』という結果が出ている。日本においても同様のことが予想されており、そういった状況の中において、異文化コミュニケーションや世代間コミュニケーションといった多様なコミュニケーション能力は社会人として強く求められる時代となるだろう。そのような世界を担う生徒たちに対し、コミュニケーション能力として「想像力により、人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」が、今後必要であると強く考えるようになった。そこで、先に述べた能力を育てるための美術教育の在り方や方法を、表現と鑑賞の活動を通して広く探求することを目的として本テーマを設定した。

1.2 研究の視点

「物事を決まった一方向からではなく、多角的な視点で見つめること」

具体的に「想像力により、人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」を育成するためには何が必要なのか。人は、それぞれの立場や価値観によって物の見方が異なる。物の見方が人によって異なっていることを理解し、「他の人の価値観を理解すること」とともに、「自分の価値観を他の人に理解してもらおうこと」が人間関係を構築していくための第一段階である。そのためには「物事を決まった一方向からではなく、多角的な視点で見つめること」を重点においた活動(=『オルタナティブ(もう1つ別の)活動』と定義する)が重要と考えた。たとえば、表現においては、発想や構想したことを材料や用具を使って実際に表現する中で、他者の表現や、意見を取り入れることにより、よりよいものに高められることがある。創造的な技能においても、発想や構想をしたことが具体的な形として現れ、表現を追求していく中で、技能が高まったり新たな技能を発揮していく。鑑賞においては、他者の考えなども聞きながら、自分になかった視点や考え方を発見し、それらを取り入れながら、自分の目と心でしっかりと作品をとらえて見ることにより、自分の中に新しい価値がつくりださ

れていくことになる。ただ、作品とは、それぞれ制作された時代背景やその時の作者が置かれている状況、性格などが複雑に絡まって生み出されたものである。「多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力」が身に着いていく授業展開を考える中で、ある程度の知識をやりくりしながら、作品の世界観を深める展開も1つであり、そういった要因を控えて作品自体から伝わる魅力を味わう展開も1つである。そういった作品要因をどうおさえるかという点もその授業ごとに考えながら実践を重ねてきた。授業では、ペアや小グループ、クラス全体など形態を変えながら、表現と鑑賞の活動の中で生徒それぞれが別の視点で考え、共有し高め合う「オルタナティブ活動」を授業で実践しながら研究を重ねてきた。

「鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発」

美術科には、表現と鑑賞の二領域があり、学習指導要領においては、〔共通事項〕を置くように、表現と鑑賞の一体化も定められている。鑑賞には、自他の作品などについて考えや思いを深く追求する活動があるが、それには、「個でじっくりと味わい、考えること」のみならず、「他者と考えや思いを共有し、高めること」が美術教育には求められていると考える。表現も同様のことが言え、自己の満足で終わるものではなく、作品への思いを他者に伝え、共有し、自己の心理を深く見つめ、その世界を表現しようと追求することが必要であると考え。つまり、鑑賞と表現はどちらも同じく、自分と他者との関係の中で高められるものであると言える。これまで身に付けた知識、技能を駆使し、また、自己発信、他者理解を繰り返す中で、一方的な見方に捕らわれず、新たな見方を生徒同士が共有しながら、その原理や物事の本質を理解させていきたい。

3. 作品との対話(授業)

2.1 題材名

「作品との対話～毛利彰の世界を通して～」

2.2 授業構成

2.2-1 教師と教材

本題材は、学習指導要領の以下の点を主とする学習である。

B鑑賞 (1) —ア— (ア)「造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めること」

題材との出会いは、幼少のころ、教師が愛読していた毛利彰氏が描いた本の表紙との出会いに始まる。当時教師は、その繊細な表現、特に「目」の表情に惹かれ、毛利氏が描いた表紙の本を買い集めていた。年月が経つ中で、毛利氏が鳥取出身であることを知り、また、ご子息、関係の方々にお会いする中で、本授業の実現となった。これまで、鑑賞の授業の多くは、教科書や図録、美術資料集などに掲載されている作品及びスライドで映し出した作品など、映像や印刷物を通して行ってきた。本来ならば美術館等に行き、展示されている実物の作品から、筆跡、色などをじっくりと鑑賞するほうがよいことは明らかである。今回の出会いにより、毛利彰氏の作品をお借りし、教室で本物に触れる機会を得た。教室で実際の作品をじっくりと鑑賞するということは生徒にとっても新鮮であり、作品に出会う感動を味わえると考えられる。

2.2-2 子どもと教師

2年生は、手を用いた自画像に取り組んでおり、手のデッサンを1年生の時より定期的に行っている。それらの学びの中で、生徒は、写実的な表現に興味を抱く傾向があり、繊細に物を描こうとする気持ちと、思うように表現できない現実の間の葛藤で、作品への思いに大きく差が生まれている。繊細で写実的な作家の作品は、生徒にとってはあこがれのような存在であると考えられる。また、それらの作品を描いた作者のそれぞれの時代、作品に対する思いを各班の解説で巡る本授業は、描く喜びと、描くことへの情熱を発見する時間であればと考える。作品そのものから発せられる印象と、リーフレットから感じ取った制作時の作者の心情を個人、班が発し、級友からの新たな視点を共有し、高め合う活動を実践しながら、作品を深く見つめる楽しさに気づかせたい。

2.2-3 子どもと教材

2年生は、これまで、生徒同士の作品の鑑賞のほかに、作品の内側に立ち、作者の思いを読み取る活動「みる・なる・しる」を行ってきた。1年生では「モナ・リザ」を2年生では「最後の晩餐」といずれもレオナルド・ダ・ヴィンチ作であり、スライドや教科書を参考に行ってきた。今回は郷土作家の実物を使用した初めての鑑賞活動となる。本授業は、各班で作品について考え、それをクラス全体に話す中で、意見を共有し、高める活動である。それらの活動によって、美術作品に関心を持ち、理解を深め、自分の価値意識をもって自主的に味わうことをねらいとする。また、各班での話し合いによって生まれた作品に対する印象や考えを語る活動の中で、個々の価値意識を持ち、互いの考えを共有しながら味わう鑑賞の楽しさを実感させたい。

2.3 本時について

2.3-1 本時の目標

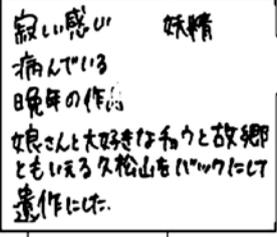
- ・ 作品の印象や直感を大事にしなが、形や色彩などの特徴や印象などから、全体を感じ、本質的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じとり、自分の価値意識をもって味わうことができる。

【鑑賞の能力】

2.3-2 期待される生徒の様相

- A：表現の工夫や意図などを想像するなどして、自分の価値意識をもって作品を味わうことができ、友達の意見を聞き発表するなどの活動を通じてさらに作品の見方を深めることができている。
- B：表現の美しさ、色、形の工夫と、作者の意図を想像するなどして、自分の価値意識をもって作品を味わい、言葉や文字で表すことができている。
- C：表現の美しさ、作者の生い立ちをリーフレットから読み取り、それを踏まえて作品を鑑賞しようとしている。

2.3-3 学習の展開

| 学習活動 | ○主な発問 ・予想される生徒の反応 | ・留意点○評価 [観点] (方法) ※手立て | 時間 |
|---|--|---|-------|
| 1. 学習のめあての把握をする。(8分) | <p>○これらの[目]はどんな表情だろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何かを思いつめている ・希望に満ちている ・人生が輝いている ・悩んでいる  | <p>・作品の[目]だけを配布し表情を作ってみる。</p>  | 8/8 |
| 2. 作品を鑑賞する。(5分) | <p>○この作品をみてどう感じるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色：暗い感じ、冷たい ・人物：沈んでいる、虚ろな表情 ・萎れたひまわり：辛くはかない思い  | <p>・スライドで「少年とひまわり」をみる。</p> | 5/13 |
| 3. 作品との対話(5分) | <p>○改めて見てみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災や火災で辛かった思いが表れている。 ・絵を描きたい思いが詰まっている。 ・まわりへの感謝の気持ちが詰まっている。 | <p>・時代背景を考える。</p> <p>・実物をみる。</p>  | 5/18 |
| 4. それぞれの作品との対話(15分) | <p>◎それぞれの作品について考えよう。</p>  <p>①男性(弟)絵を描きたい思いが筆跡や材料から伝わってくる。</p> <p>③繊細な表現。目的に沿うように華やかな表情と色合いで見物者を魅了している。</p> <p>④穏やかで優しい表情で商品の味や流行性を示唆している。</p> <p>⑤史実に基づいて人物の表情を計算して描かれている。</p> <p>⑥久松山の美しさ、幼き日の楽しかった思い出を懐かしみながら描いている。</p> <p>○各班で作品紹介をしましょう。</p> | <p>・実物と自作フルーツの情報を元に各班で作品を割り当て、作品について話し合う。</p> <p>・制作された時代を考慮して紹介する。</p> <p>○作品の印象や直感を大事にしなが、形や色彩などの特徴や印象などから、全体を感じ、本質的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じとり、自分の価値意識をもって味わっている。【鑑賞の能力】(観察、ワークシート)</p> <p>※作品からの印象を伝え合うように声掛けをする。</p>  | 15/33 |
| <p>(12分)</p> <p>寂しい感じ 痛んでいる 晩年の作品 娘さんと大好きなふりと故郷ともいえる久松山をバックにした遺作には。</p>  | <p>作品との対話 この作品にはどんな思いが込められているだろうか？ 1933年 17歳 少年とひまわり</p>  | <p>・質問も受け付けながら、説明する側、聴く側の両方で意見を交わす中で考えを深めさせる。</p>  | 12/45 |
| 4. 本時のまとめをする。(5分) | <p>○今日の活動を振り返ってみましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷土作家について知り、作品の持つ力について考えることができた。 ・友達の考えからより深く作品について感じる事ができた。 | <p>・ワークシートに記入</p> | 5/50 |

自作リーフレットと生徒の言葉（一例）



【イ ガン】1984 7月(部分)

鳥取大学附属中学校
鳥取市湖山町南4丁目101番地
TEL:0857-31-5170

作品との対話

～毛利彰の世界を通して～



2年 組 番 名 前

毛利 彰

[1935～2008]
鳥取市に生まれる
父、祖父ともに日本画家



① 苦しい中でも
絵を描こうと
したのはなぜ
だろう?
（毛利彰の言葉）

小学～高校時代
小学～中学 蝶の採集に凝り、久松山を一日中走り回っていた。
8歳、鳥取大震災で貸家が被害にあう。
14歳、父死去。
苦しい生活を強いられる中、画家をめざし、アルバイトをしながら油絵を描き続ける。作品①
17歳、鳥取大火で毛利家は資産をすべて失う。
この年、「少年とひまわり」制作。作品②
授業料代わりに寄贈。（高校の先生の後押し）
高校3年生の時に全国展に入選。卒業後、芸大を目指し東京へ。専門学校で空間表現を学ぶが、生活苦から断念。
20歳で帰郷。鳥取大丸へ入社

② 1989年作
なぜ月？
どんな魅力
があったのか
だろう？

22歳、夢をあきらめきれず、再び東京へ。（妻の後押し）
百貨店「伊勢丹」の宣伝部へ入社。
数々の広告賞を受賞。イラストレーターとしての知名度を築き上げた。作品③

60年代後半、時代の広告表現はイラストから写真、映像へ

14年間の伊勢丹の広告から離れ、フリーランスに。
企業広告作品④、書籍の表紙作品⑤、挿絵、オリジナル作品⑥など一貫した手仕事にこだわり、幅広い活動を行った。

④ 写真、映像が中心のなかで
依頼があったのはなぜ？

⑤ 描かれているものにはどんな思いが込められているのか、ここはどこ？



描かれているものや色、描き方、時期を含めて作品について考えてみよう。

作品②について

苦しい中で描いた絵で、た
けど、実は使っていないとい
うことだ。たゞで色々な色を
使って、前を向こうとしていた
のではないかと思った。
絵の色は暗いけど、心積を
そのまゝ乗せた色ではなく、
色々な心積をまぜたものだ
と
思った。「少年とひまわり」は、
セマワリが描かれていた
ので、暗い、暗い絵が
と死んだら
羽の上に 赤い羽を 20
何枚入った方がいいかと、
何枚か かけしつて、
色を出
かいたと 死んだら
かいたと 死んだら

自分たちの作品③について

人類が初めて月に上陸した
年に描かれた作品「月と地球」
・服装はその当時流行していた
ものが描かれている（メイクも）

自分たちの作品④について

- ・寂しい感じ
- ・「アハハ」を笑？を
表現している??
- ・人の足がどんでん
かかっている。
- ・迷っている
- ・暗い頃の自分

メモ

鳥取大震災 1943年9月10日に発生した地震。震源地は鳥取県高
群養村野坂川中流域、M7.2。
鳥取大火 1952年4月17日から翌日にかけた鳥取県鳥取市で起
った大火災。市街地のほとんどを焼き払い、罹災面積
180haにのぼる甚大な被害をもたらした。（7年復興は
る）

自主的な
予習メモ

1990年 講談社出版文化賞・さし絵賞受賞
鳥取城趾から近くにある吉川春彦家の銅像のデザインを
担当した。

振り返り

| 作品名 | 制作年 | 制作場所 | 制作状況 |
|-----------|------|------|------|
| ① 不明 | 1949 | 油彩 | 制作中 |
| ② 少年とひまわり | 1963 | 油彩 | 制作中 |
| ③ 月と地球 | 1969 | 鉛筆 | 制作中 |
| ④ アハハ | 1990 | 7月 | 制作中 |
| ⑤ 信長戦記 | 1998 | 鉛筆 | 制作中 |
| ⑥ イガン | 1984 | 7月 | 制作中 |

①(題名不明)1949?油彩/②少年とひまわり1963
油彩/③「月と地球」1969 鉛筆/④「アハハ」
1990 7月/⑤「信長戦記」1998
鉛筆/⑥「イガン」1984 7月

表紙①～⑥部分

2年 組 番 名 前

2.4 実践の様子について

本題材は、第2学年の4学級131名の生徒を対象とし、2018年6月下旬から7月上旬に行った。授業では実物作品は7点を使用した。

- ① [題名不明] 1949? 油彩 / ② [少年とひまわり] 1953 油彩 / ③ [ポスター伊勢丹] 2点 1969 鉛筆・アクリル / ④ [パッケージミスターーナッツ] 1990 アクリル / ⑤ [信長戦記] 1998 鉛筆・アクリル / ⑥ [マイマドンナ] 1984 アクリル

図 2.4-1 自作リーフレット部分より

当初は② [少年とひまわり] のみで行う予定であった。②は作者が高校生時に制作したもので、作者の弟を描いた作品であり、当時の恩師からの後押しにより授業料の代わりとして高校に寄贈されたものである。②の作品について深めるだけでも授業としては成り立つであろうが、[1] 毛利彰氏の作風がアクリルから油彩と多岐に渡ること [2] イラストレーターとしての仕事としての作品、オリジナル作品があることなどを考慮して、ご子息毛利葉氏のご自宅を訪問し、各作品のエピソード等をお聞きした上で、油彩2点①②ポスター2点③商品パッケージ・雑誌表紙原画2点④⑤アクリルオリジナル作品⑥をお借りした。図 4.2-2 は授業後の振り返りとその内容を分析したものである。

学習形態については、実物作品を用いたこと、共同学習（オルタナティブ活動）の面白さを感じる生徒が多く見られた。例えば①の作品は油彩であるが、布キャンパスに描いたのではない。

担当した班は、実物作品の表面から作者が幼少時に用いていたであろうスケッチブックの表紙に描いたことに気づき、クラス全体にプレゼンをした。



聞いていた生徒は驚き、作品に近づきあらゆる角度から覗き込む様子があった。また、なぜその素材を使ったのかという点について、時代背景や当時の作者（家族）が置かれていた立場を踏まえて作者の心情を考察する姿も見られた。



③においては描かれたもの（地球・月）や年代から、その時代の流行を考察したり、⑥においては、描かれているもの（石、蝶、女性）から考察した作者の思いの発表を聞いた上で、聞き手側からも意見を交わしながら、作品に込められた思いを深める姿が多く見られた。また、作者が鳥取市出身であることに親近感を抱き、作品への思いを読み取ろうとする意欲へつなげたり、自身の気持ちと重ねあわせる様子も伺えた。

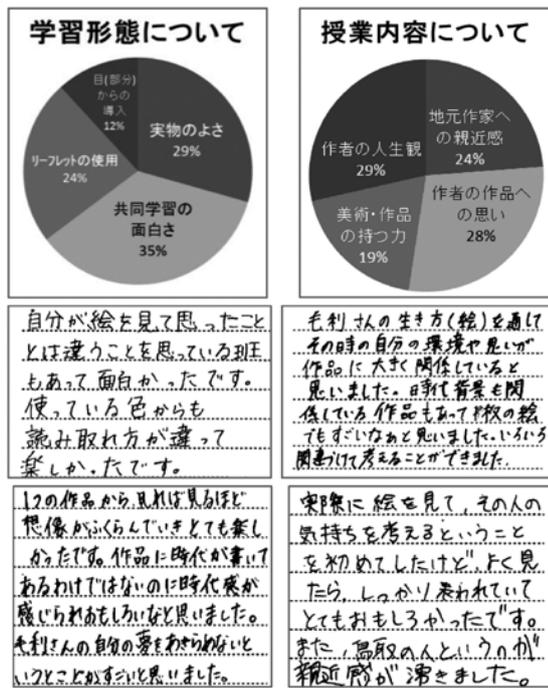


図 2.4-2 授業の振り返り（対象生徒 2 学級 66 名）

2.5 本題材の分析

第2学年の4学級のうち、2学級においては先に述べた学習展開を行った。もう2学級においては、比較対象として教師主導による鑑賞授業を行った。また、自作リーフレットは左ページのみを配布し、史実のみとした。これらを踏まえて、7月下旬に筆記テストを行い、どのように表出しているかを確認した。筆記テスト（図 2.5-1）は全部で6問設定し、図 2.5-2 はその正答率である。図 2.5-2 において、オルタナティブ活動による学習展開を行った学級を対象学級1, 2とし、教師主体で行った学級を3, 4とする。

V. 次の各問に答えなさい。

ア  イ 

ウ  エ 

①図ア～エの作者を答えなさい。
 ②図ア～エを制作された年代順に並べ替えなさい。
 ③図ア～エの中で[1]飲食店[2]百貨店の広告として制作されたものをそれぞれ記号で答えなさい。
 ④図アは1969年に制作されたものだが、時代を象徴するものとして、ファッションのほか何に描かれているか。答えなさい。
 ⑤図ウの作品名を答えなさい。
 ⑥図エにおいて人物のほか2つの物が描かれていることから場所が推測される。[1]人物以外に描かれている2つのものと[2]場所を答えなさい。

図 2.5-1

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
|----------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 対象学級1 | 94% | 52% | 94% | 94% | 97% | 45% |
| 対象学級2 | 97% | 85% | 97% | 97% | 82% | 33% |
| 学級1・2平均 | 95% | 68% | 95% | 95% | 89% | 39% |
| 対象学級3 | 84% | 88% | 90% | 65% | 70% | 81% |
| 対象学級4 | 82% | 65% | 88% | 64% | 48% | 42% |
| 学級3・4平均 | 83% | 76% | 89% | 64% | 59% | 62% |

図 2.5-2

図 2.5-2 において問④⑥は教師からの教授法ではなく、作品から生徒自身が見出し、全体へ発信する共同学習の中で獲得した知識を確認できる問題である。問④は対象学級との比較において、大きく表出されたと考えることができる。しかし問⑥については仮説とは異なる結果となった。問④と⑥の違いは、問④の図アが表面的なものを問うたのに対し、問⑥の図エは描かれたものが何を示すのかという、内面的な問いであったことが大きな違いである。本来授業で深めるべき作品は、商業的な図アと図エを比較すると、作者の心情が大きく表れた図エの方である。実



際、授業時にも図エに関して、表現意図に対して様々な意見を交わす様子が見られていた。

しかし、試験結果から読み取るに、図アの時代を踏まえた作品のストーリー性の方が印象深かったのかもしれない。また、問②の結果が示すに、教師一人からの順を追った説明と問いかけの授業法のほうが、その時々作者の心情と制作年代の繋がりが易かったのかもしれない。生徒による共同学習においては、どうしても発信する生徒の発し方や知識量によって差が生じてくる。こういった点を踏まえて、今後は生徒同士で深める



過程において教師の支援の工夫、改善が必要であると考えている。また、研究協議会では授業形態の生徒の学びの自由度がもっとあっても良いのではという意見もあった。また、今回の授業においては、多くの実物作品を取り扱った。しかし、すべてを深く鑑賞するには、1時間はないという見方も当然ある。今回はすべての作品についてオルタナティブ活動で鑑賞し、トータルとして作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じとり、自分の価値意識をもって味わう授業を目指した。よって、すべての作品にこちらから担当を決め、その作品について考える授業形態をとったが、各自で鑑賞する作品を選び、惹かれた作品について語る方が思いも高まるのではないかという意見もあった。今回の分析結果、及び協議会での意見等を踏まえて今後の授業改善を図っていきたいと考える。

3. 他学年の実践例

3.1 題材と対象学年、実施期間

題 材 名 : 「作品との対話～みる・なる・しる～」

対象学年 : 全学年

実施期間 : 4月～6月に1～3時間

3.2 内容と今後の展望

年度当初にあたる時期に全学年で行っている。[作品との対話-多様な視点で物事を見つめ、その世界観を深める力-] = [生徒の学びの充

実] + [限られた時間数] = 鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発を踏まえて、各学年の成長過程、学習目標に応じて鑑賞対象を設定している。授業内容は共通して、まず既成の名画を鑑賞（「みる」）し、そのうえで作品の登場人物の心情を考え、

表情、動きを演じ（「なる」）写真作品を制作、その制作活動を通して、個人、集団（班・学級）で深く学ぶ（「しる」）という流れである。1年生では美術作品との出会いを目標にレオナルド・ダ・ヴィンチ作「モナ・リザ」を扱っている。2年生では、顔と手の表情とその表現のよさを学ぶことを目標に同じくレオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」を扱っている。



3年生では、自画像を制作するにあたり、作者の心情、思いを深く感じ取ろうとするとともに、発想力を豊かに考え、表現しようとする心情を育てることを目標に、ゴッホ、レンブラント、ピカソなど複数の自画像を扱っている。鑑賞の一環としてより深く作品を味わう活動として「なる」活動は、演じる側、撮影する側の相互関係が必要であり、年度当初の仲間作りにもつながると考える。また、写真（2年生はコラージュの要素も必要）は短時間で制作できる作品となる。掲示等も早い段階で可能であり、生徒の学びの意欲にもつながると考えている。3年間を通じて行っていることと、先輩の表現を見るとき、学年が上がるたびにその表現に生徒は工夫を凝らしている。2年生では衣装や小道具を自主的に準備する姿も多くみられた。ただ、「なる」活動のおもしろさ、楽しさが先行しすぎて、学びが広がらないのではといっ



た懸念もある。本題材については、さらなる「みる」「しる」といった制作背景、作者の心情をより深く考察し、共有する活動を充実させるなど、授業展開のよりよい改善も必要と考えている。

4. 今後の取り組み

これまで、学びを充実させる鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発に年間取り組んできた。実物作品を扱った今年度の題材は鑑賞のみであるが、作品への情熱、郷土への思いを感じ取れた鑑賞活動から作品（表現活動）へつなげる新たな教材も可能であると考え。作品が優先されがちな美術教育の現状において鑑賞の過程からの表現、鑑賞を踏まえての表現といったように鑑賞を含めた学びの跡に作品が残る実践を今後も取り組んでいきたいと考える。

最後に、今回実践するにあたり、毛利彰氏のご家族、ご子息である毛利葉氏、イラストレーター毛利彰の会の皆様には、作品の使用のほか、取材にもご協力いただいている。深くお礼と感謝を申し上げます。

文献

- 永田佳之（2005）オルタナティブ教育－国際比較に見る21世紀の学校づくり。新評論（東京）、368pp.
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説美術編。文部科学省、6pp－140pp.
- 上野行一（2001）まなざしの共有－アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ。淡交社（京都）、181pp.
- 毛利彰[画]鳥取県立博物館 編(2011)イラストレーター毛利彰の仕事：平成22年度鳥取県立博物館企画展：シリーズ鳥取の表現者 file.02。鳥取県立博物館（鳥取）、4pp－115pp.
- 筒井宏樹（2019）イラストレーター毛利彰の軌跡－鳥取美術と戦後日本のイラストレーション史のなかで。イラストレーター毛利彰の会（鳥取）、2pp－63pp.
- 鳥取大学附属中学校（2017）自立し、つながり、探究し、創造する力の育成やりのた例えば（鳥取）、107pp－113pp.